



ある番組の収録前、控え室で若手お笑い芸人たちが話をしていた。いわゆる大部屋と呼ばれる楽屋は、スタイリストやメイクも同席しており、がやがや騒がしく、ほとんど寄り合いとでもいった様相である。資料が散かっている卓を囲み、歳の近い者同士、和気藹々と話が弾んだ。

「今日ってさ、何の日か知ってる？」

その中でもリーダー的存在の男が口火を切った。

「いや、知っているよ。あれだろ、あれ」

その相方であるひょうたん顔の男がほとんど言下に答える。

「お前と付き合いはじめた記念日だよな？」

「恋人か！」

矢庭に別のメンバーからのツッコミが飛ぶ。

「いや、そのツッコミもおかしいだろ。だいたい、知ってるじゃなくて覚えてるって表現になるだろ、その場合」

「はい！」

と生真面目な学生ぶって、挙手する男があった。

「はい、佐々木くん！」

「1のゾロ目が並ぶ日、でしょう？」

「正解！」

「ああ、そういうことか！」

また別の男が膝頭を叩いた。

「さすが佐々木くんだね！ 『委員会』で成績トップなだけはある」

「いや、それお笑い芸人としてはあんまうれしくねえから。でも、確かに誰かもそんなこと言ってたなあ、今日は1がすげえ並ぶ日だって」

「でも、何が凄いの？」

れいのひょうたん顔が阿呆みみたいな表情で阿呆みみたいなことを問う。

「いや、だからさ、2011年の、11月11日の、まあ、今10時過ぎだけど、11時11分になったらさ、な？ すげえじゃん、地味に」

「おおっ！ しかも、平成も23年だもん！」

「いや、一個も当てはまってないだろ、それは」

「来年は、24年だし」

「もうそうなってくると意味わかんないから、完全に。お前はまず『委員会』でトップとった方がいいよ」

「これで視聴率も11くらいとれればねえ」

稀代のコント師と呼ばれている男が、ぼそりとした口調でそう喝破した。

「言うんじゃないよ、本当のことを」

一場は笑いさざめく。

「とにかく、今回みたいにゾロ目になるのは、すげえ確率らしいんだわ」

「なるほどねえ」

先ほどから、自身は一言も発言していないのに、喜色満面で皆の話を聞き、いちいちらしく「なるほど～」と相槌を打っているメンバーがいた。みさこである。メンバーの中で、唯一の女芸人であった。

「おっ、時間だ」

大御所の先輩芸人が控え室に颯爽と現れたので、場の空気は一変した。

皆、先刻までとは打って変わって真摯な眼つきになり、連鎖反応のように次々と席を立ち、その先輩芸人のところへ、おはようございます、と丁寧な挨拶にいった。

「おつかれさまでした～」

収録後、みさこは楽屋にいるメンバー全員に向かって、精一杯の笑顔と大声でもって帰りの挨拶をする。

楽屋でくつろぎながら、雑談などをして盛り上がっている他のメンバーたちは、みさこの方へ向き直り、「おつかれ一っす」「またなあ～」などの空返事をよこすと、すぐまた騒々しい雑談へと戻っていく。それ以降、みさこの方を振り向くことはない。

楽屋はもう別の華やかな笑いでごった返している。

みさこは、とりあえず自分の誠意が楽屋にいる全員に正しく伝わったことがわかると、精一杯の笑顔で上がった口角を少しづつ下げていったが、悲しいかな、結局は引き攣った苦笑いのような形となった。その苦笑いの表情のまま、マネージャーにも挨拶をした。

「じゃあ私、お先に失礼しますね」

「あ、みさこ、みさこ」

「はい？」

「今度ね、みさこに良い報告ができそうよ！」

「え？ なんですか？」

「それはまだ秘密。でも、みさこのキャリアにとって重要なターニングポイントになりそうなことだよ！」

マネージャーは嬉々としてそう言いながら、自身のかばんの中からジャポニカ学習帳を取り出し、

「そのためにも、はい。きっちりスケジュールは守りましょう！」

と言って、みさこに手渡した。

珍しいことに、みさことマネージャーは、ジャポニカ学習帳でスケジュール管理をしているのだった。

みさこのマネージャーは女のひとで、寺山といった。年齢は32歳で、みさこより6つも年上であった。いきおい、二人はほとんど姉と妹のような関係になってしまった。寺山はおかつぱ頭に黒縁めがねという冴えない容貌とは裏腹に、なかなか利発で、姉御肌な一面を持っていた。ことにみさこは妹のような存在だから、そのサポートにかかる熱も人一倍だった。「しつけ」と

称して行っているさまざまな指導も、周囲の人間から見ると、甘ったるい、他愛ないものであった。以前、二人の関係について、芸人仲間から次のように言われたことがある。

「ここは小学校か！」

「今どきの芸人は皆スマホでスケジュール管理してるつつうのに」

「ほんと、寺山さんはみさこに対して親馬鹿ですよ」

みさこはそそくさと電車に乗り込み、ようやく人心地を取り戻した。

みさこは売れっ子お笑い芸人になった現在でも、電車通勤をしていた。みさこの仕事後の行動は、真っ先に帰宅するか、父親と夕食に行くか、そのどちらかだった。芸人仲間と食事に行くことなど、まったくとっていいほどなかった。そんなみさこのプライベートの様子を見るにつけ、同期のお笑い芸人たちは、みさこのことを「サラリーマン芸人」などと揶揄するようになった。が、生来生真面目なみさこにとって、その点は馬耳東風なのであった。

「ねえ、ママあ、まだあ？」

「まーだ。もう少し我慢すれば恐竜が見えてくるからねー」

みさこの右手に座っている親子がなごやかに会話していた。

みさこが乗っている路線は今地下を通っているが、やがて高架へと変化し、一気に眺望がきくようになり、眼前に新名所である巨大な橋梁が見えてくるのだ。この路線がネット上においてその新名所の写真撮影のベストスポットとして紹介されているせいか、車内から写真を撮ろうとする人たちが後を絶たなかった。が、最寄り駅がそれよりずっと前のみさこには無関係な話だった。周囲の人たちは、――特にマネージャーの寺山などは、この東京の新名所登場にひどくはしゃいでいる様子だったが、みさこは別段行ってみたいとは思わないのだ。東京に住んでいても決まった場所へしか行かないみさこは、仕事をしている引きこもりのようだった。そのくせ、東京特有のモラルが宙吊りになっているようなこそばゆい感覚に身をゆだねるのが好きな一面も多分にあるようだ。

れいの親子を見るときもなく見つ、
「単独ライブかあ」と胸の内で呟き、大きなため息をつこうとしたが、胸の重苦しさのせいで、失敗した。ふと、今日の楽屋でのメンバーの一言がよみがえる。

「今日ってさ、何の日か知ってる？」

もちろん、みさこは知っていた。

みさこにとって11月11日は、前田優子が死んだ日であった。

とてもおいしい自然食バイキングの店だった。

みさこは好物のかぼちゃ煮に手をつけた。父親であるひとしも飄々とした調子で、鶏肉のみそ焼きをがつつと口へ運んだ。いつもと変わらない親子の図であった。

みさこは立ち上がり、ひとしの分のかぼちゃ煮を取り皿に乗せてこようとした。そんな娘の甲斐甲斐しさに対して、ひとしはだるそうに手を振って、断った。

みさこは顔をしかめてひとしに忠告した。

「肉ばっか食べるのはよくないよ。しっかりバランスよく食べないと」

「最近、太ったんだよ」

ひとしはふふふふふと笑って、

「幸せ太りかな？」

と漏らした。

みさこは、

「なに言ってるの。酒太りでしょう」

と言って、適当にあしらう。

みさこは食事の際、ひとしの顔をまじまじと見つめてみることもある。

そのたびに、みさこは複雑な感情に囚われる。なぜとって、ひとしが振る舞っている笑顔や冗談と、その白髪頭や深い皺たちとは、対極と言っていいほどかけ離れているからであった。

母親である曜子が死んでからというもの、残った家族の灯を絶やさないようにと、お互いこまめに助け合い、共生してきた二人だったが、最近になって事情が変わってきた。自営のエンジニアリング業から手を引き、年金暮らしとなったひとしは、毎日毎日夜のお店を飲み歩くようになったのである。

ひとしは一心不乱に食べているように見えて、出し抜けにものを言い出す。

「ところがどっこい、酒太りでもあるし、幸せ太りでもあるんだよ。お父さんな、最近、いい人見つけちゃったんだ」

「え？」

みさこは本気で目を丸くして、

「どんな人よ」

と即座に聞き返す。

「よく行くスナックのママさ」

こういった親の無神経さは、普通の家庭ならまず味わうことはないだろうな、とみさこは思う。

「……今度、ラジオでネタにするからね」

みさこは泰然とした態度でそう言うと、ナプキンで口元を拭いた。

「いいよ、いいよ」

ひとしは上機嫌である。

「そろそろ行くか？ それともデザートも食うか？ まあ、要らないか。しかし、よくこんな安くていい店を見つけたな。この値段なら、帰りは楽々タクシーで帰れるんじゃないか？」

「あなたの娘ですよ。当然ケチということになります」

みさこは努めて冗談めかしてそう言い返す。

「俺の娘なら、当然怠け者、ということにもなる」

ひとしはけらけらと笑い出し、コップに残っている水をぐいと一飲みしてから、

「ていうか、少しは歩いた方がいいぞ、おまえ。やばいぞ、その体型。俺のこと言えないぜ」
と無遠慮な放言をした。

みさこは言下に、
「これは商売道具だよ！」
と切りかえした。

ひとしはそのポケに対し、またけらけらと笑い出し、右腕を曲げながら前に突き出し、それを左手でぼんぼん叩くジェスチャーをしながら、「腕上げたねえ」などと囁くので、みさこはそれを無視し、「さ。会計、会計」と冷静に呟きながら、そそくさと席を立ち上がった。タクシーを呼ぶこともできたが、結局、「ちよいと健康のために歩くわ」と言い出し、徒歩で帰ることになったひとしの背中を見送りながら、みさこは「ああ、そういえば単独ライブの件、話せなかったな」とぼんやり思った。

みさこの住むマンションは築十年の格安賃貸マンションであった。それでもみさこに不満はなかった。地下駐車場や大きな庭が併設されているような芸能人御用達の高級マンションは、とある理由から倦厭していたのだった。

部屋に一歩足を踏み入ると、あちらこちらに脱ぎ散らかした服が笠のように重なり合い、足の踏み場もない。部屋の中央の小さな卓上には、開きっぱなしの女性雑誌や、同業者のライブDVDや、チョコレート系のお菓子などが無秩序に置きっぱなしになっており、なかなかひどい有様である。お笑い芸人としてのみさこしか知らない人がこの部屋を見たならば、そのあまりのギャップにぎよっとすることだろう。

しかし、クローゼットの中に限ってはとても奇麗だった。ここはみさこにとってお気に入りの場所だった。みさこ自身、その理由はわかっていないのだが、みさこは何か辛い事があると、クローゼットの中に入り、じっと体育座りをして何時間も過ごす、という奇妙な癖をもっていた。

右の壁には止まったままの古時計がある。この時計を見ると、いつも11月11日のことを思い出す。前田優子が死んだ日である。

前田優子の死体は、死後三日経ってから、親戚の者に発見された。

芸能界を引退した矢先の死であったため、その死の原因についてはさまざまな憶測が飛び交った。が、何より衝撃的だったのは、三日も死体が発見されなかったことであった。家賃月60万の高層マンションに住み、引退前に出した写真集の印税も推定で1億以上はあったという、あの華やかな女性芸能人の前田優子には、内実、深い付き合いのある人間が一人もいなかった、ということになるからだ。それは芸能界の荒涼さを十分に伝えていた。死体に目立った外傷はなく、心不全ということだった。部屋からは常用していたとされる睡眠薬が発見された。この一件から〈孤独死〉という言葉が世間に定着した。

そのニュースを見た日、みさこの部屋の時計が止まったのだ。

偶然の一致を面白いのは馬鹿らしいと思いつつ、みさこはなにか無視できないものを感じてしまった。当時、みさこは所属会社の養成所にいた頃で、前田優子と直接会ったことはなかったし、年齢的にも一回りも上で、一見したところ、まったく縁遠い人だと感じていたのに、この一件のせいで、なぜかしら前田優子の身の上が自分のことのように思えてしまったのだ。以来、

みさこは高層マンションが嫌になった。

あの日からもう二年の月日が経ち、ほとんどの人が前田優子の存在を失念していた。

が、みさこだけは忘れていなかった。前田優子の存在はいつも視界の隅に映っていたし、むしろその影は日増しに大きくなっていくようだった。この二年間で、自分を取り巻く状況は大きく変化した。昨年いわゆる「ブレイク」して以降、確かに仕事は順調だった。けれど、前田優子との因縁は心ひそかに続いていたのである。

鏡がそれを映し出しているように思う。

風呂をわかしている間、みさこはまじまじと自分の顔を見てみた。

最近の体重増加のせいか、頬はパンパンに膨れ上がり、一見にぎやかな面貌だが、そこにはあからさまに孤独の相が浮かんでいた。ひとは無神経に放言していたが、なにも好き好んで太っているわけではなかった。ストレスによる過食が主な原因だったのだ。数時間前まであれほど陽気に笑っていた人とは思えない自分の顔を見ながら、次第に募ってくるうっとうしさに、今日観ようと思っていた先輩お笑い芸人のライブDVDも、見る気が失せてきた。

「笑ってくれたらそれでいい」

今ではこの文句を冷ややかに見ている自分がいるのだ。それよりも、

「寂しい」

そんな素朴な一言すら口に出せずにいる現状がただただ恐ろしかった。父親であるひとしが死んだら、わたしは孤独になるのだ。これは誤魔化しようのない、厳粛な事実だ。

みさこは電気を消して、ベットに入り、横になった。

横になった途端、大きな沈黙の中にいるのを感じた。大きなため息をつこうとしたが、今度はさっきの食事による胸のむかつきのせいで、失敗した。

これは孤独死の不安だ、とみさこはとっくのとうに気づいていた。

本日一本目の仕事は、バタフライエフェクトという人気お笑いコンビによる番組『しゃべくりカオス!』の収録であった。毎回一つのテーマを決め、出演者の女性たちに自由に討論してもらう番組だった。女性特有の言い合いの激しさが売りで、一つのテーマについて討論すると言っても、進行していくうちに話は徐々に脱線し、最終的にはただの感情的なやりとりになっていたりするのも、この番組の面白さの一つであった。

今日のテーマは『不幸になりそうな女とは』で、生き馬の目を抜くような厳しい芸能界を生き抜いてきた女優や、バブル期を引きずっていることを売りにしている中年女性タレントや、最近のクイズ番組ブームでテレビに出始めた東大卒のニューカマーなどに混じって、みさこは収録にのぞんだ。

まず、司会進行を補佐する女性アナウンサーが近々の熱愛ネタでいじられ、皆、手を叩いて笑いこけた。みさこは一人、蚊帳の外のようなようだった。

議論は進み、いきなりみさこに話がふられた。

「みさこさんなんかはさ、意外と高望みして不幸になっちゃうタイプなんじゃない？」

「ええーっ！ いや、そんなことないですよ！」

とみさこは調子よく話に乗っかる。

すかさず別の出演者が加勢に入る。

「ああ、たしかに。お笑い芸人なのに、自分をアイドル視しちゃってるんだ」

場は、ぎやはははは、と品のない笑い声で満たされた。仕方なしにみさこも、いやいやいや、と言って苦笑した。

「だって、もう三年も彼氏いないんでしょ？」

みさこが困惑の態で、

「……まあ、そうですねえ」

と答えると、今度は、ええーっ！ という驚嘆の声で場が満たされた。

「だって、コンパとかも誘っても、ぜったい来ないもんね」

「なんで行かないの？」

「……うーん」

みさこは苦笑しながら、考えるフリをした。

そこで、れいのバブル期を引きずっている中年女性タレントがここぞとばかりに、

「セックスはしといたほうがいいよ！ 肌にいいんだから！」

と口を挟んだ。

また、皆がどっと笑った。

司会のバタフライエフェクトは、「ちょっとダメダメダメ！」と注意しながらも、その実、満面の笑みである。

調子づいてきたれいの中年女性タレントは、わざとしかめっ面を作り、

「肌荒れがひどいのよ、最近」

と呟き、さらなる笑いを投下する。

「要するに、不幸かどうかは肌を見ればわかるってことね」

「美肌の秘訣は、やはり、恋、ですか？」

「恋かあ。この歳になると、一回りして新鮮な響きがあるわー」

そんな横暴なトークが続く中、みさこはただただ苦笑いしているより他なかった。

所属事務所がみさこのことをお笑い芸人ではなく、アイドル扱いしているのも確かに事実であった。その実、記者会見などにおいても、恋愛関連の質問には答えるな、と口止めされている。しかし、答えるもなにも実際に恋愛などしていないのだから、みさこにとってはその扱い自体が責め苦のようなものだった。

いつの間にか他の人にターゲットがすり変わり、話がずれていった。波が引いてゆくように、安堵感と疎外感に囲まれる、この感覚。芸能界に入って何度味わったことだろう、とみさこは思う。

収録が終わり、くたくたに疲れて楽屋に戻ると、マネージャーの寺山が待っていた。

みさこは、おつかれさまです、と笑顔で挨拶し、「あ、そうだ」と思い出したように言い、スケジュール確認のために自身のかばんからジャポニカ学習帳を取り出そうとしたとき、それをさえぎるように寺山が、

「み・さ・こ。今日はね、みさこお待ちかねの、良い報告のネタバレをしちやいまーす！」

と切り出した。

みさこは目を丸くして、

「え？ほんとですか？」

と純粹に食いついた。

寺山は子供が悪巧みをしているときのようにニヤニヤ笑いながら、

「しかも、その良い報告、2つもありまーす！」

と言って、意地悪にもみさこを焦らした。

みさこは苦笑しつつ、

「なんですか、もう。ヒントはいいですから、早く教えてくださいよ〜」

と甘ったれた調子で返した。

「なんと、……みさこの単独ライブが決定しました！」

そう言うと寺山はまるで子供のお誕生日会のように、わー、おめでとー、と言いながら、みさこにパチパチパチと拍手を送った。

「本当ですか！……わたし、頑張ります！」

うすうす感づいてはいたものの、やはり感動的な瞬間だった。

同期のお笑い芸人たちが軒並みライブDVDを出している中、自分だけが出せていないことが気がかりだったみさこにとって、今回の単独ライブ決定は本当にうれしかったのである。

「いやあ、よかった、よかった」

みさこは喜色を満面に湛え、しばらくはそればかりを連発していたが、ふと我に返り、

「あれ？でもさっき、良い報告が2つあるって言ってましたよね？もう1つはなんなんで

すか？」

と質問した。

寺山は秘密を言いふらすのを我慢できないような態で、

「……私、今度結婚することになったの！」

と答えた。

みさこは天地がひっくり返るぐらい驚嘆した。

「え、ほんとですか？ どなたですか？」

平静を装ってはいるが、内心、え？ え？ え？ という感じだ。

「違う事務所のマネージャーなんだけど……」

そう言うと、寺山は照れくさそうに自身の携帯を操作し、相手の顔写真をみさこに見せた。

写真を見ると、寺山と同じく黒縁めがねをかけて、ひよろひよろしている、小柄な男だった。もとい、みさこの目は何も見ていなかった。みさこはショックのあまり、相手の顔を仔細に見る余裕すらなかったのである。ただ胸中には慌ただしく言葉が駆け巡っていた。——なぜ今までわたしに一言も言ってくれなかったのだろうか？ これまで仲良くやってきたのに。寺山さんから見れば、わたしはそういった恋愛話を交わす対象ですらなかったとでも言うのか？

そんなことを考えているうちに、無邪気にジャポニカ学習帳などを取り出そうとしていた自分の姿が次第に腹立たしくさえ思えてきた。

寺山は相変わらず照れ笑いが収まらない様子で、

「全然、イケメンじゃないでしょ？ でも、いいの。普通が一番なのよ。まあ、お互い忙しいから、結局、同業者で収まっちゃったってワケ」

「なるほど」

みさこは青ざめた顔で、笑顔が引き攣らないように努力した。

「まあ、とにかく」

寺山は、ごほん、と咳払いをして、真面目な顔に戻り、

「単独ライブまであまり日もないから、これからは体調管理には十分気をつけてね。なにか問題あったらライブに響くからね！」

と言った。

次の仕事であるラジオ収録に向かっている間、みさこは父親宛に単独ライブが決定したことをメールに打ちながら、寺山の結婚報告が自分の中でずいぶんと尾を引いていることに気づいた。

確かに三年以上彼氏はいない。

けれど、今は仕事第一と思っているみさこにとって、この状態は苦ではないはずだった。しかし、最近ではそれと矛盾するかのようになり、夜眠るとき無性に寂しくなり、孤独死の予感が頭をよぎる始末だ。

生前、前田優子が口にしていた言葉で、印象に残っている言葉がある。

「人に迷惑をかけちゃダメ」

最後のテレビ出演となった、とある情報バラエティー番組のパネラーとしての仕事の際、そのとき扱っていた通り魔事件のニュースに対して、前田優子がそう発言したのである。この言葉を聞いた周囲の人間はどっと笑い、「優子ちゃんがそれ言う？」と主演者総出でツッコんだものだ。

前田優子は最初グラビアアイドルとして出発した。が、それ以上の活躍の場がないことにフラストレーションを感じていた彼女は、仕事を取るために枕営業をしていたことを自ら暴露しだした。それから、彼女の迷走がはじまったのである。

以後、彼女は覚せい剤で掴まったり、AV女優になったり、センセーショナルな自伝本を書いたり、社会的野心の達成のためにありとあらゆるものを売るという方向へ走った。そしてその都度、周囲の人間とのいさかいが生じたのである。たとえば自伝本の中で実際の出来事とはかけ離れた描き方をされたとして、モデルとなった実在の友人が激怒し、裁判になったりした。しかし、彼女は言い訳を一切しなかった。

ある時期から、次第に芸能界のご意見番的な立場に祭り上げられることに成功した彼女は、コメンテーターやコラムニストとしての仕事が増えていった。これにより、彼女の芸能界での立ち位置も固まってきたかに思えた。

が、三十六歳のとき、彼女は突如芸能界を引退をした。

はっきりとした理由は述べなかったものの、ブログには「人に疲れちゃった。もう迷惑かけたり、かけられるのは、いや」という意味深な文章が残されていた。それ以降、彼女は高層マンションで引きこもり同然の生活を送るようになった。

はっきりしないことだらけだったせいか、それから前田優子に対するさまざまな噂が絶えなかった。その多くは「前田優子は精神病で日々奇行に走っている」といった類のものだった。深夜に前田優子が奇声を発していたのを聴いた、という人が出てくれば、今度は、前田優子が裸足でエレベーターに乗っているのを見た、という人すら出てきた。

そして、突然の死である。

彼女は、謎と、謎にしておくべき人間の深淵を残して、この世を去ってしまった。

みさこは思う。

前田優子はきつと、「人に迷惑をかけちゃだめ」という言葉を、「自立しろ」という意味で言ったのだ。芸能界に入ってからというもの、みさこはこの言葉を守るようになった。というより、東京で女芸人をやっていくにはそうなるより他はないのだ。しかし現在のみさこは、「自立はすなわち孤立である」という感さえ抱き始めているのだ。

念願の単独ライブが決まったのだ。なぜ満足しない？ とみさこは自分自身に言い聞かせてみる。いや、うれしい。うれしいのだ。この充実感は何物にも変え難いものだ。しかし、である。その充実感では決して埋まらないものもまた、みさこの中にあるのである。

「さあ、今夜も始まりました、みさこのときめきナイト！ ちょっと聞いてくださいよー、リスナーのみなさん。わたし、ここ最近二人の恋人を失ったんですよー。いや、ほんとですよ。この間ね、また父親と食事に行っただですよ。そしたら父親が、最近女ができた、って言うんですよ。どうも飲み屋系の女らしいんですけどね。まあ、いいですよ。恋愛は自由ですから。

……って、全然納得してない言い方だよね、これ。あはははは！ まあ、これが一つ目の失恋ね。で、二人目は誰だと思えます？ ……うちのマネージャーなんだよ、これが！ うちのマネージャーが、あの『しゃべくりカオス！』の収録後ね、いきなり、結婚することになったの、って言い出したの。もうね、わたしね、耳を疑いましたよ、はつきり言って。……でもね、いいんです。わたしもう、新たな恋人、見つけちゃいましたから。それはね、……仕事です！ はい、なんのことかわからないでしょう、リスナーのみなさん。まあ、番組後半でするある重大発表に関連しているんですけどね、まあ、それは後々のお楽しみ、ということで。それじゃあ、さっそく曲いきましょうか！ 今ノリにノってるアイドルグループ〈ネットワークチャイルド〉で、『桃色の世界』」

その日はずっと雨だった。

みさこは仕事終わりのその夜、焼肉弁当とホットスナックのから揚げとスープ春雨を食べた。遅い夕食を食べ終わると、風呂に入り、顔にクリームを塗り、寝室のベットにもぐりこんだ。そこである外国作家の短編集を読もうとしていたとき、インターホンが鳴った。ぎょっとした。なぜなら、寝室の扉をノックされたような気がしたからだ。

しばらくじっと様子を伺っていた。もう一度、インターホンが鳴った。一回がひどく長く思えた。傍に置いてある携帯を見ると、時刻はもう十一時をまわっていた。おかしい点が多すぎて、逆にこれ以上考えるのは無駄なことに思えた。下手に時間を間延びさせてしまうといよいよおかしいことになりそうだ、と思い、みさこは小走りに玄関まで走っていった。

「どなたですか？」

「すみません、怪しい者ではないんです」

それは楽の音のような儂い声だった。

みさこは無意識のうちに玄関の扉を開けてしまった。なぜモニター映像もろくすっぽ見ずに無防備に扉を開けてしまったのか、みさこ自身にもわからなかった。

外には黒の長髪に白シャツを着た少年が、微笑しながら立っていた。

外は土砂降りのわりに傘を持っている様子もなく、しかもまったく濡れていなかった。みさこはただ、どきり、とした。実際、街中で白シャツのみを着ている人は意外に少ない分、少年の格好はひどく目立って見えた。

それに加えて、年のころがまったくわからなかった。ずっと年下の少年のようにも見えるし、同じ歳と言われればそうかもしれない、とも思う。そもそも、この微笑はなんなのだろう？

しかし、こうした外見によって、少年が丸腰であることを、つまり、自分の敵ではないことを、みさこは無意識のうちに感じ取ってしまった。それが決定的だった。

「お願いがあります」

「え、なんですか？」

みさこは少年の美に恐怖を感じていた。

「簡単なことです。部屋に入れてもらいたいんです」

「なに言ってるの。あなた、誰なんです？」

「外は寒いし、それに濡れます。雨が止むまで、雨宿りさせてください。だめですか？」

少年の瞳をじっと見てしまった。その瞳の誘惑は恐ろしいくらいだった。

近々単独ライブを控えているみさこにとって、こんなところで一騒動起こすのは不本意だった。

「……じゃあ、少しだけ、休んでいきます？」

「そう言うと思いました」

少年はにやりと笑った。

みさこはただ戸惑った。なんと答えたらいいいのか、わからないのだ。

「いい家ですね」

少年は部屋に入ると、まず真っ先にそう言った。

足の踏み場もないほど散乱した部屋の様子を見ても、少年はさして気にとめる様子もなく、図々しくソファにどかっと座った。

「あの」

みさこはおそるおそるたずねた。

「何か飲みますか？」

「それもいんですが、何か食べ物をいただけないでしょうか。今日は何も食べてなくて」

「何も食べてないの？」

みさこは、むっとした。なぜか、このときだけタメ口になってしまった。

「昨日は、あるお姉さんに食べさせてもらった。けど、今日はあてがないんだ」

少年もつられて自然とタメ口になった。

「あなた、何歳なの？ 家族はいないの？ なぜ、わたしのところへ来たの？」

「わかっているくせに」

そう言って、少年はふふふと笑った。

みさこはぞっとした。

台所でちょうど一つ残っていたカップラーメンにお湯を入れながら、みさこは、何者なのかしら、と思った。しかし、それ以上何も思考が進んでくれないのだ。

みさこはカップラーメンを持っていくとき、手が震えないように精神を集中させた。

リビングにカップラーメンを持っていくと、少年の姿はなかった。また、ぞっとした。さっきからずっとぞっとしっぱなしだった。

小さな卓上にカップラーメンを置き、寝室へ行ってみると、ベットに腰かけ、れいの短編集を読んでいる少年の姿を見つけて、みさこは息を呑んだ。

「……そこで、何をしているの？」

「こんな作家が好きなんですね。おかしい」

「やめて！ 本を置いて！」

思わず叱りつけるような口調になってしまった。

「ごめんなさい」

少年は微笑しながら素直にあやまった。

みさこは、本当に調子が狂う、と思った。

少年がなぜか正座をしながらラーメンをすすっている間、みさこは少年の姿をまじまじと観察してみた。わかったことが一つあった。この少年には、人間の生物的な側面がない。一から十まで人工的なのだ。これは尋常ではない。

「あなた、名前はなんていうの？」

少年はカップラーメンをすするのを中断し、ちらとみさこの方を見て、

「ウィリアム」

と答えた。

みさこは思わずぶっと吹き出した。あまりにも馬鹿げているからだ。

少年はカップラーメンをあっという間に食べ終わると、出し抜けて、

「……今日の雨は、もうあがったみたいですね。帰ります」

と今度はやけに他人行儀に言い放ち、颯爽と立ち上がったので、みさこは、え？ とただただ当惑した。

少年が玄関まで歩いていくその様を、一種の不気味さと共にみさこは見守っていた。

「あ、待って」

名状しがたい不安からか、みさこは少年を呼び止めてしまった。

「そこにある青のビニール傘、あなたにあげるわ。……もう、わたしのところへ来ちゃだめよ」

「ありがとう」

意味ありげな微笑を残して、少年は帰ってしまった。

みさこは部屋を見渡した。

服の山も、女性雑誌も、お笑いのDVDも、そのままだった。なんの変化もない。が、それが逆にみさこをぞっとさせた。寝よう、寝てしまおう、と自分を落ち着かせるために呟きながら、寝室へ向った。

れいの短編集が目に入った。そこで、はっとなった。なぜとって、先ほど少年がとっさに答えたウィリアムという名前は、この短編集に出てくる登場人物の名前をもじったものだったからだ。

それ以降、みさこは少年のことが本当の意味で気になりだした。と同時に、無防備にも玄関の扉を開けてしまった自身の愚挙をちくちく後悔しだした。——なんで見ず知らずの男を部屋に招き入れるようなマネをしたんだろう？

気持ちを落ち着かせるために携帯を見ると、一通のメールが入っていた。寺山からだった。

『体調管理、気をつけてね！ 夜更かしするな～』

みさこは、ありがたい、と思った。けれど、ただそれだけだった。寺山は自分と同年代ではない。所詮、年上なのだ。それに、結婚する身の上なのだ。やっぱり、深いところでは自分と分かり合えない。そんな考えが頭にこびりついて離れないのだった。

「なんか、最近ぼーっとしてない？」

寺山は不審顔してみさこにそう言う。

「え？」

「もしかして、恋？ この間、ラジオで二人の恋人を失った、でも、単独ライブという新たな恋人ができた、って話してたけど、もしかして、それ以外にも恋人がいるの？」

「え、いや、そんな」

とみさこはあわてて否定する。

寺山はくすくすと笑って、

「みさこってさ、根が真面目だから、実はわかりやすいのよね」

と言う。

みさこは胸の奥で何かが軋む音を聞いた。そろそろこの人に合わせるのも限界かもしれない、

とも思う。

それでも努められるところまでは努めるのだ、と心に濁して、精一杯の笑顔でもって、「茶化さないでくださいよ！ 今は単独ライブのことで頭がいっぱいなんですから！」と返す。

「緊張してる？」

「いえ、楽しみです。やっぱり、最近ネタ番組も減ってきちやってるし、芸人としてのプライドを示せる場ですから、やっぱり楽しみですよ」

そうは言いつつも、寺山の思惑の半分は当たっていた。

あの日以来、みさこの頭の中はウィリアムのことでいっぱいだった。

一体、普段は何をして暮らしているのだろうか？ 年のころが想像できないから、何とも言えない。もし未成年だったら、かなり不自然だが、家出少年といったところだろうか？ だが、もし成年だったら、なおさらに想像できない。昨日はあるお姉さんに食べさせてもらった、などと言っていたから、ヒモ的な生活を送っているのかもしれない。だとしたら、なぜそのひとの家に定住しないのだろうか？ わからない。ただ、ウィリアムの性格は一から十まで他人任せだ。それは間違いない。ああいう調子で何人もの人間に迷惑をかけて暮らしているのだとしたら、本当に許せない。

などと色さまざまなことを思案していると、気楽にスマホをいじったりして過ごしている人が大半の楽屋の中であって、一人恐ろしい秘密を抱え込んでいるようで、不安だった。こうして、周囲の人たちを見てみると、どんなに美人な人でも、どんなに美男子な人でも、髪の毛がぱさついたり、髭の剃り残しが汚かったり、体全体に生活の疲れが染みこんでいたり、なんだかんだいっても生物的であり、完璧な美をもっている人など一人もいないものだ。しかし、ウィリアムは違った。加えて、彼は笑い方も違った。あれは人間の笑いではない。徹頭徹尾、人工的な笑いだ。

またしても雨の日だった。

その日は稽古終わりで、自分の思うとおりにいかなかったせいか、心地良い疲労感というより、むしろいかめしい気持ちを抱いて、みさこは帰宅した。帰ってからも、少しでも完成度を高めようと、演技の練習に余念がなかった。要するにもうみさこはライブモードに入っていたのだった。

そのとき、インターホンが鳴った。その長ったらしさに、今日のみさこは苛立ちを覚えた。たずねてくる者は、ウィリアム以外にいるはずがない。

「ハロー」

ドアの向こうからウィリアムの声が聴こえた。

「傘を返しにきたよ」

疲労からくる冷たい意思により、今日のみさこは落ち着いていた。

「それはあなたにあげたの。返さなくていいわ。今日は帰って。なんのもてなしもできないから」

「お願いがあるんだ」

ウィリアムの声のトーンは変わらない。

「雨があがるまで、ベットで寝かせてくれないか」

「ダメに決まっているでしょう。なにを言っているの、あなたは。今度は、本当に警察を呼ぶわ」

「わかったよ」

ウィリアムはなぜかくつつつと笑っている様子だ。

「他の家にお邪魔することにするよ。それじゃ」

「待って！」

みさこは地団駄踏みたいような気持ちになった。またしてもウィリアムのペースだ。

「大丈夫。雨があがったら、出ていくよ。きっと、そうする」

みさこは前回同様ソファにどかっと座ったウィリアムに、しぶしぶながらホットココアを入れてあげた。ふーふー吐息で熱を冷ましながらかココアを飲むウィリアムを観察していると、前回とは違う白シャツを着ているように思えた。

「.....その白シャツ、前着ていたのと違うんじゃない？ もしかして、あなた誰かから服を貰っているの？」

「ああ。いわゆる老若男女からね」

「.....お金がないの？」

「誰かが恵んでくれるから、自分で持つ必要がないのさ」

やめなさいよ、人に迷惑をかけるのは、という言葉が口元まで出かかったが、なんだかそれは言っただけの台詞のように思えたので、言うのをよした。

ともかくにも、ウィリアムとそんな会話をしているとみさこはどっと疲れるのだった。

「ちょっといい？」

「なんだい？」

「わたし、仕事が忙しくて、疲れてるの。もう、眠りたいの」

「ああ、眠ったらいい」

「あなた、さっきベットで眠りたいって言ってたわよね」

「そうだね、ダメかい？」

「ダメ。ソファでならいいわ」

「最近、ぼくはベットで眠っていないんだ」

ウィリアムの言葉は、決して語勢は強くないのに、ほとんど脅迫に近い説得力をもっていた。

「ダメに決まってるでしょう？ いい加減にして」

「じゃあ、こうしよう。ぼくが君の職業を当てられたら、ぼくもベットで眠っていいことにしてくれ」

「いいわよ。当たるわけないから」

「君は、.....冒険家さ」

みさこは嘖き出した。と同時に、それまでのいかめしい気持ちが、その一言によってすっかり

消え去ってしまったことに気づいた。

「まあ、半分正解ってとこね」

「じゃあ、半分だけ、願いを聞いてもらおうかな。眠るのはやすよ。ただ、ベットに入れてくれるだけでいい」

「.....好きにしてよ。もう電気を消すわよ。とにかく、疲れてるの」

みさこはベットに入って横になると、ウィリアムの分のスペースを空けるために、できるだけベットの隅っこの方へと寄った。

背中越しにウィリアムの気配が感じられた。

「少し話をしないかい？」

「.....もういいわ。わたしがソファで寝る」

「隣で人が眠っていることに慣れてないんだね、君は」

みさこは黙り込んでしまった。

「人って不思議なものさ。だって、幼い頃は人肌に触れる行為はとても自然なことなのに、それから長い間人肌との接触がなくなってしまうんだからさ」

「.....何が言いたいのよ」

「教育の話さ」

「なんの話をしたって、おかしいのは、あなたよ」

「ああ、確かにおかしいのかもしれない。けど、それは世間がおかしいと呼んでいるからに過ぎないよ」

「それも何かの本の文句でしょう、どうせ」

「ぼくはさ、君が自然にふるまえるようにしてあげたいんだ」

「やめてよ！」

先刻から言っている台詞もきっと笑顔で言っているのだろう、と考えると、みさこは怖かった

。 やきもきしだしたみさこは、ベットの中で体をウィリアムの方へと向き直した。ウィリアムをベットから手で押し出して落っことしてやろうと思ったのだ。

が、そのとき、右手を捕まえられた。

「この指。この指が好きなんだ」

「え？」

ウィリアムの顔が、すぐ間近にあった。

「ねえ、お願いがあるんだ」

「あなたはお願いばかりね。なによ、この手で殴ってほしいの？」

「この、きれいで、繊細で、やさしい指先。これは君の歴史そのものなのだろう？ だから、語ってほしいんだ」

「え？」

「幼い頃から今まで。自分で自分の指のことを、どう思っているのか」

みさこは暗闇の中で、ウィリアムの瞳をじっと見つめてしまった。

「.....なんであなたにそんなことを話さなきゃいけないのよ」

そうは言いつつも、頭では自分の指についての思い出が次々と駆け巡っていた。小学生の頃、ピアノを弾いていたときの指先。中学生の頃、好きだった同級生にお手製のチョコを作ったときの指先。ああ、思い起こせば、自分の指先はずっと自分だけが見てきたのだ.....。

などと考えていると、突如、ウィリアムがみさこの右手の人差し指をペロっと舐めた。

みさこはあっと思った。

みさこは内心の恥ずかしさを客観視することに十分慣れてきたつもりだったが、これにはさすがに「だ、だめ」と感じてしまった。

ウィリアムは、丁寧に、それこそ愛するように、みさこの指先を舐めた。

みさこの吐息が漏れた。

ややあって、

「おや。どうやら雨があがったみたいだ。それじゃ、帰るよ」

と言って、ウィリアムはすっとベットから離れていった。

その後の記憶ははっきりしていない。自分自身がいつ眠ったのかすら、判然としなかった。朝、薄目を開けてみたら、当然ウィリアムの姿はなかった。雨はすっかりあがって、からっとした上天気になっていた。

一夜にして、みさこは変わってしまった。

ウィリアムの愛撫を欲するようになってしまったのである。

ウィリアムは必ず雨が降っている日に限ってやってきた。

そして、やってくるごとに、愛撫される箇所が徐々に増えていった。

手の指の次は足の指を。その次はすねからふとももにかけてを。少し飛躍して鎖骨や肩を。自然な流れで背中を。やがて一周してきたかのようにお腹のへそを。その順番に意味があるのかはわからなかった。が、みさこにしてみれば、どんどん自分のプライベートな箇所へ近づいていってよう、いやにエロティックに感じられるのだった。

さらにウィリアムは、

「体の部位に思い出があるならば、言葉にも思い出があるはず」

として、みさこに言葉についての思い出をも語らせ、みさこの中にある言葉をも愛撫した。ウィリアムはたとえば次のような言葉たちでみさこを愛撫した。

「人は本当の意味でのセックスをしていない。君はそう思っているね。ぼくもそう思っている。みんなセックスという制度に囚われているんだ。キスの次はこうしてああしてなんて手順は本当はないんだ。そのとき感じた通りにすればいいんだ。それなのに、挿入して、出して、終わり。そして、みんなセックスするときより、オナニーするときの方が感じてしまう、という始末なんだ。もうお分かりだろうけど、従来のセックスという行為は、ぼくたちの本当の欲望を取り出すのにふさわしくないと考えるべきなんだ。じゃあ、本当の欲望が取り出される場所はどこだろう？ そう。夢の中だ。人は夢の中でセックスするのが一番感じるんだ。夢の中でこそ、本当に人が恋しくなり、発情する。いわば夢の名残りである朝が、本来のセックスにとっては、もっとも理想的なタイミングなんだ。けれど起きてしまえば、そこには即物的な現実があるばかりだ。寝起きの顔なんて、人の生活の中でもっとも見たくない瞬間だ。そう。永遠の矛盾なんだ。届きそうで、届かない。夢と現実を繋ぐものがない限り、本当の欲望は満たされないんだ。そういうことに気づかないで、ただただ物理的に気持ちいいだとか抜かしているうちは、人は本当のセックスとめぐり合うことはできない。単なる作業に過ぎないんだよ」

「お互いの心臓の鼓動を気にしているうちは、まだ一つになんかなれない」

「過去を想像できる女の子はつまらない。未来を想像できてしまう女の子もつまらない」

「27っていうと圧迫を感じるけど、20と7つ。そう言い換えると、若く聞こえるから、不思議なものさ」

「人生経験なんて関係ない。どう過ごしたって、30歳になったときは、『30歳になってしまった』という表現になってしまうんだ。つまり、時間とはそういうものさ」

「人は動いていないときがいちばん美しい」

云々。

なにを言っているの。

たとえみさこがそう反発したところで、そんな言葉はウィリアムの微笑の前に敗北するのが落ちだった。それにみさこは内心、もはやそんな反発の余地がないほど、ウィリアムとの邂逅にはまってしまっていたのである。

思い出を語るという行為も、当初は自己嫌悪を生むような気がして嫌だったのだが、実際にやってみるとそれはとてもエロティックな行為だった。特に平常お笑いの世界の決まりきったトークに慣れているみさこにとって、自分の思ったことを素直に口にするという快楽は、新発見といってもいいほどであった。

しかし、雨が降り止むと、決まってウィリアムは帰ってしまうのだ。

不思議と朝まで降り続く雨はなかった。そのたびに、みさこの体には甘い痛みが残った。ウィリアムが来ない日に、ウィリアムの夢を見たときなどは、ウィリアムの言うとおり、朝、とても発情している自分があるのだ。これでもし、朝まで雨が降り続いたとしたらどうなるのだろうか？

と考えると、それだけでもう胸がドキドキしてくるのだった。

とうとう愛撫されていない部位は、顔と胸と性器だけになった。

ところがある日、つまらないことが起こった。

みさこは、いつものようにウィリアムが正座しながらカップラーメンを食べているところをまじまじと眺めながら、ふと、まじめに聞いてみたのである。

「あなた、——本当に人間なの？」

「ははははは！」

ウィリアムは子供のように笑って、

「今のはコントに使えるんじゃないかい？」

「無理よ。あなたは存在自体が異質だから、コントにならないわよ」

「そう」

ウィリアムはふふふと低く笑った。

「……まったく、どこで貰っているのよ、その白シャツ。いい加減、教えてくれてもいいじゃない。毎回毎回、違うものを着てるじゃないの」

「無理強いしているわけじゃないのに、みんながくれるんだ。ただ、それだけさ」

「やめなさいよ、人に頼るのは」

ウィリアムはそれに答えず、

「この前ね、ぼく、自殺未遂をしたんだ」

と言った。

みさこは、

「またまた」

と小ばかにして、目を細めたものの、内心、本当かしら、とも思うのだ。この言葉に限らず、ウィリアムの口ぶりは、とてもその場の思いつきで言っている風には見えなかった。

「ちょっと前に都心に大きな橋が開通しただろう。あそこでだよ」

ウィリアムはカップラーメンをすすりながら、他人事のように淡々と報告する。

「確かにあの橋は歩行者も通れるけど、そんなら大きなニュースになってるはずじゃない」

「ぼく、橋は嫌いさ。第一、父親に似ている」

「なにを言っているの？ いつもそうやって茶化すわよね」

「君が何を知りたいのかを、ぼくは知っているよ。君の笑いが正しいかどうかだろう？」

「違うわよ。そんな話じゃなかったじゃない」

「違くないよ」

そう諭すように言って、ウィリアムは静かに微笑している。

「君が本当に欲しているのは、笑いじゃない。君が本当に欲しているのは、三段オチの会話じゃない。君が本当に欲しているのは、本音を思いっきり打ち明けることなんだ。そのために、君はぼくという鏡が必要なんだ」

「あなたがなにを言っているのか、わたしにはさっぱりわからないけど、わたしはお笑い芸人という仕事をプライドをもってやっているの。わたしは、一人でも多くの人を笑わせて、幸せにしたいの」

そう啖呵を切ってみたものの、みさこはウィリアムに痛いところを指摘されたような気がして、次第にむかつ腹が立ってきた。

ウィリアムは微笑しながら言葉を続ける。

「でも、それは君自身の幸せにはならないよ。笑いをもらった側も、君の笑えていない姿を知ったとき、もらった笑いが嘘だったと思い、幻滅する。強制された笑いなんて、自分も他人も殺すことさ」

「いい加減にして！」

みさこは今までにないほどの怒声を発した。

「少なくとも、人に迷惑はかけないわよ、あなたみたいに！」

みさこは、とうとう言ってはいけない一言を言ってしまった、と思った。

それでもウィリアムは相変わらず微笑んだまま沈黙している。

これまで、ウィリアムはしばしば会話の返答を沈黙で返すことがあった。

しゃべることが本業であるみさこにとって、この沈黙という返答はいつも気詰まりの種だった。

「ほら。本当の君は、お笑いの世界から程遠い、怒りと、不安と、孤独に満ちているじゃないか」

そう言われたみさこは、なにかに耐え切れなくなり、パジャマ姿のまま、後ずさりするように玄関へと走っていった。

戸外へ出て、扉をばたんと叩きつけるように閉め、気づけば右隣の部屋のインターホンを押していた。

「隣に住んでいる者です！ すみません、わたしの部屋におかしな男がいるんです！ お願いします、助けてください！」

しばらくすると、骨組頑丈で、眉毛が濃く、唇の厚い、人好きしそうな面貌の男が、玄関の扉を開けて出てきた。

「どうしました？ そんなに青い顔して。おーい、家内」

「どうしたの？ あなた」

玄関口から見える廊下から、その男の奥さんらしき女の人が不安げに顔を出してきた。

「あら！ あなた、芸人のみさこちゃんでしょう！」

「はい……」

隣人に自分の名前を呼ばれただけなのに、それだけでみさこは今にも泣き出しそうになってしまった。が、それを必死に抑えて、

「こんな夜分に、本当に申し訳ありません……。わたしが家に帰ったら、へんな男が家にいたんです……。本当に申し訳ないんですが、ちょっと行って見てきてくださいますか？ ご迷惑なのは、百も承知です……。でも、今のわたしじゃ、恐くて見にいけないんです……。とにかく、警察にだけは連絡したくないんです……」

と懸命に状況説明をした。

隣人の男はその太い眉をひそめながら、「本当ですか？ それは一大事ですな……」と呟き、それから奥さんらしき女の人となにやら目配せをし、お互い仔細に頷き合ってから、

「任せてください。困ったときはお互いさまですから！」

とはっきりした語調で宣言した。

みさこは、

「本当に、すみません……」

と俯きがちに繰り返すばかりだった。

男は、

「みさこさんは、私たちの家の中に入ってください！」

と言い残し、みさこの部屋を見に行った。

みさこは隣人の家の玄関に立ち尽くしながら、総身ぶるぶると震えていた。奥さんらしき女の方は、みさこにどう声をかけてあげればいいのかわからず、文字通り困惑の態であった。

ややあって、男が戻ってきた。

「あの」

男はいかにも怪訝そうな表情で目をぱちくりさせて、

「……誰もいなかったですよ？」

「え？」

みさこも急いで戻って確認してみると、確かに男の言う通りだった。

誰もいないのだ。

部屋の配置もそのままである。みさこは、そんなばかな、と思った。ウィリアムが逃げ出した物音など一切しなかったはずなのに。

事が済むと、みさこは隣人の二人に、

「……今回のことは、本当に、なんといいのかわからないのですが、……とにかく、ご迷惑をおかけして、大変申し訳ありませんでした。……あの、この期に及んで、こんなことを頼むのは大変恐縮なんですけど、今日起きたことは秘密にしていただけませんか？ ……すみません。それだけは、どうか、お願いします……」

と消え入りそうな声で懇願した。

結果、人の良さそうな二人は、他言しないことを鷹揚に引き受けてくれた。

みさこは、顔色を失ったまま、部屋に戻った。

寝室のベットに自身の体を投げ打って、うつぶせのまま、枕で顔を隠し、しばらくじっとしていると、

「少なくとも、人に迷惑はかけないわよ、あなたみたいに！」

という、つい先刻自分が放った言葉が脳裏で反芻された。それから、とめどなく自責の言葉が脳裏に浮かんでくるのだった。

——なんということだ。こんな大事な時期に、こんな騒動を起こして、わたしは何を考えているのだろうか？ 今日のことかもしマスコミに漏れ伝わったら、わたしのキャリアもご破算になるに違いない。そうなればもう、取り返しがつかないのだ。ああ、もはやあの二人が他言しないことを祈る以外にない。明日も朝一からライブの稽古なのに、こんな精神状態でどうなることだろう。誰か、助けて……。

そんな具合に、ひとしきり憂鬱の穴にはまった後、れいの馴染みの沈黙がやってきて、ふと、考えてみると、こんなに本音で他人と会話したのはそれこそはじめてかもしれない、というへんな感慨がわいてきた。

かくして、この小さな事件は、みさこに絶望への予兆とへんな感慨深さを残すこととなった。

結果は無残だった。

どこからどう漏れ伝わったのかは判らないが、案の定、週刊誌に、

《お笑い芸人のみさこ、恋人との喧嘩で、一悶着？》

との見出しが載った。

その内容は、夜中に同棲中の彼氏と奇声とも思えるほどの大声で喧嘩をしたらしい、という至極単純なものだった。

寺山は、めずらしく厳しい面持ちで、みさこを待っていた。

「みさこ。この記事、本当なの？」

みさこは名状しがたい口惜しさを噛みしめながら、

「……嘘です」

と言った。

「そう」

寺山は、深いため息をついた。

「でも、困ったわね、この時期に」

「……わかっています」

「わかってない！」

寺山はめずらしく語勢を強めた。

気まずい沈黙が流れた後、寺山は今度はいくぶん優しげなトーンでしゃべりはじめた。

「——今だから言うけど、最近みさこの様子がおかしい、とは思っていたの。もちろん、仕事は一生懸命やっているわ。でも、それ以外の場だと、上の空だったりすることが多かったじゃない」

「……」

「何か、隠していること、あるの？」

「……いえ、ないです」

あの日以来、ウィリアムは来なくなっていた。

雨の日になると、みさこはやたらめったら部屋を見渡すという行為ばかりを繰り返すのだった。

気は確かなのだ。

以前の、自分一人の部屋に戻っただけの話なのだ。

なのに、どこかが違う。

これほどまでに自分の生活の輪郭がくっきり感じられることは、今までになかった。それは見事なまでに、空虚なものだった。

口ではなんののかんと文句を言っておきながら、みさこは完全にウィリアムにはまっていた。

みさこ自身、話ここに至って、それをはっきりと認めざるを得なかった。

古びたクッションを捨てたあと無性にそのクッションが恋しくなるように、みさこはウィリアムのことが気がかりで気がかりで仕方なくなった。——わたしは、ウィリアムのことを愛していたのだろうか？ だから、こんなに喪失感があるのだろうか？ いや、違う。わたしはウィリアムの言葉が気がかりなのだ。いや、それも正確じゃない。わたしにとって、ウィリアムは……。

などととりとめもないことを考えているうちに、いつのまにか仕事場に着いている、というような虚ろな日々が続いた。

リハーサルの忙しさも相まって、みさこの顔色は徐々に悪くなり、ついには目の下に紫色のくまができてしまった。

朝、そんなひどい面貌で寺山に挨拶をすると、寺山は深刻な調子で、

「いけない子だ」

と言うのだった。

結婚して間もない寺山をはじめ、周りのスタッフや所属事務所にまで迷惑をかけていることが、ここにきてみさこを苦しめはじめた。

しかし、単独ライブはもう間近なのだ。なんとしてでも自制心を保たなければならない。

そう必死に努めようとしても、今のみさこは何度もパンチを浴び意識朦朧になっているボクサーのようなもので、その覚悟もちょっとしたことで崩壊してしまいそうなほど、精神的に追い詰められていた。

ほんの微風にもおののく今のみさこの心には、例えば次のような寺山の言葉さえ、動揺の種になるのだった。

「大丈夫よ、みさこ。まあ、話題作りになったと考えれば、今回の件だって悪くないわよ」

日がな一日、みさこの目は虚ろになっていった。

これまでテレビカメラの前でずっと笑顔でいられたことが、今となっては不思議な現象に思えてくるほどだった。

——気にしなければいい……。ウィリアムのことなど、気にしなければいい……。そうしないと、わたしの大事な単独ライブまで、だめになってしまう……。

そう自分を叱る声は、以前よりもあきらかに弱くなっていた。

そんな折、ひとしから、

『久しぶりに二人で食事をしよう！ 単独ライブが決まったんだろ？ お前を元気づけてやろうじゃないか！』

というメールがきた。

みさこは虚ろな目で、

『わかった』

とだけ打ち込み、返信した。

白いテーブルクロスの上で、ナイフは光り、皿はきらめき、フォークは燦然としていた。食事もとても美味しそうなものばかりだった。

しかし、みさこにとってそれらは薄い膜の向こう側にいた。こういった普段行かないような店を選ぶひとしの魯鈍な見せびらかしに対する苛立ちもあったが、それも決して強烈なものではなかった。ただただ虚ろな気持ちだった。

一方のひとしは、内心、これ以上ないくらい面食らっていた。

もちろんひとしはみさこが週刊誌に載ってしまったことを知っていた。しかし、その記事を事実無根の嘘の記事だと受け取っていたし、もし仮に同棲中の彼氏がいたとしても、それはそれで喜ばしいことだ、くらいに思っていたのだ。

それが箱を開けてみれば、みさこはそれによってひどく落ち込んでいる様子なのだ。

正面切って話題を切り出す勇気のない親子は、お互い、気まずい時間を耐えなければならなかった。

しばらく両者とも黙り込んだまま、時たまお互いがお互いの顔をちらと見ては、早々に視線をずらし、何事もなかったかのように食事を口に運ぶ、という動作を繰り返していた。

結果、こともあろうに大食漢のひとしさえスープを半分近く残してしまう有様だった。

やがて、もういい加減沈黙に耐え切れなくなったのか、ひとしの方が、自身の膝頭をしきりにさすりながら、

「……でも、あれだよな」

と不器用にも話を切り出した。

「単独ライブなんだよな、もうすぐ」

「……そうね」

とみさこは上の空で返した。

二人とも目線は合わせていない。

また、沈黙が流れた。

ひとしはひたすら自身の膝頭をさすりながら、言葉に窮した挙句、

「……仕事で何かあったのか？」

という愚問を口にした。

「……うるさい」

みさこは、ああ、とうとう言ってしまった、と薄く薄く思った。

「わたし、帰る」

みさこは立ち上がり、店のエントランスの方へ小走りに走っていった。途中、ウェイターとすれ違い、軽くお辞儀をした。ひとしの顔を振り返って見ることはなかった。きっと呆気にとられた表情をしているに違いない、とみさこは思った。

《人気お笑い芸人みさこ、単独ライブドタキャン！ 原因は男？》

《人気お笑い芸人みさこ、仕事放棄！ 男に骨抜き状態？》

週刊誌はこぞってそのような見出しをつけ、みさこを「渦中の人」として祭り上げた。

各局の情報番組も、みさこの単独ライブドタキャンの件を大々的に報道した。

コメンテーターの意見はおおむね次のようなものであった。

「ちょっと前にも、ほら、恋人と大喧嘩したことが話題になりましたもんね。やっぱり彼女もまだ若いですから、そういう風に気持ちが不安定になることもあると思うんですよね」

「心配は心配ですよ。ただ、どんな原因があったにせよ、彼女の取った行動はあまりにも無責任だと思いますね。色んな関係者の方々に迷惑をかけているわけですから。お笑い芸人だって立派な社会人なわけですから、しっかり自分のことは自分で責任取らないと駄目だと思いますけどね」

また、とある大きなお笑いイベントの発表記者会見の場で、タキシード姿に身を包んだ若手お笑い芸人たちに、みさこが起こした一連の騒動についての質問が飛んだ。中には、いつぞやの番組収録でみさこと共演していた若手お笑い芸人の姿もちらほら散見された。

まず、以前番組の収録が一緒だったときの様子を聞かれて、

「いや、別にそんな変わった様子はなかったですけどねえ」

と一人の芸人が答えると、

「そうっすね。いつもどおり、明るかったと思いますよ」

とまた別の芸人が答える。

彼らはそれ以上のことは決して言わない。

こういう空気になると、彼らは妙にかしこまった態で、あたりさわらずの返答しかしなくなる。これは若手お笑い芸人の習性であった。

また別の若手お笑い芸人が、神妙そうに答える。

「ああ見えてね、みさこはすごく真面目な奴ですから。まあ、でも彼女もお笑い芸人なんで、きっと元気に復活して、笑いで返してくれると思ってます」

場にいる一同がその発言にしみじみと頷く。また、発言した本人も自分のコメントに心ひそかに頷いている。

さりげない形で高感度を上げること。それが彼らにとって最も重要なのだった。

自身の単独ライブをドタキャンした日、みさこは、クローゼットの中でずっと体育座りをしていた。まんじりともせず、目は何も見ていなかった。今、みさこは何者でもなかった。張り詰めた社会性はすべて消え去り、糸の切れた凧のようになっていた。

『みさこ、お願いだから、連絡ちょうだい！』

そんな寺山からのメールにも、みさこは気づかないままであった。

みさこの携帯の着信履歴は、上から下までマネージャーの寺山で埋まっていた。

みさこの携帯は電源が切られたまま、リビングの卓上のジャポニカ学習帳の隣に放置されていた。

みさこはクローゼットの中で、今の状況とは全然関係のない遠い昔のことをぼんやり思い出していた。母親の曜子が癌で闘病中だった頃のことだ。

前田優子の存在はみさこの人生に多大な影響を与えたが、実の母親である曜子の存在はあまりみさこに影響を与えなかった。その理由は、あきらかに曜子が早死にしたことに起因していた。

曜子は、みさこが小学4年生のときに大腸癌の転移による肺癌で死んだ。そもそも大腸癌が見つかったときにはすでにステージ4であった。

みさこにとっては、曜子が大腸癌の手術のために入院していた頃の記憶がいやに鮮明である。逆に、肺に転移してから死ぬまでの経緯はなぜかあまり記憶にない。

当時のみさこはワケもわからぬまま、ひとしに連れられて、曜子が入院している大学病院へと足繁く通った。

「あら、いらっしやい」

6人部屋の、右列2つ目のベッドに、やつれきった顔をした曜子の姿があった。

家にいるときのひつつめ髪ではなく、痛んでパサついた髪の毛が鎖骨の辺りまでおろされており、子供のみさこは、家にいるときと別人だ、と思った。

「見て、この花」

ベッド脇の卓上に置かれた花瓶に、色とりどりの花が刺してあった。

「先日、妹の貴子が来てね。これ以外にも、いろいろ差し入れしてくれたのよ。……まったく、いつも大げさで困るわ」

ひとしは、ろくすっぽ曜子の顔も見ず、

「着替え、ここに置いておくぞ」

と言って、落ち着きがない。こういう深刻な場面でのひとしの態度はてんで駄目であった。

ひとしは不器用そうに、曜子に話しかける。

「おまえ、ちゃんとものを食べているのか？」

曜子は平然とした口調で、

「あなたたちこそ、ちゃんと食べているの？ ——みさこ、大丈夫？ お父さん、ちゃんと料理作ってくれてる？」

と言って、笑った。

みさこは、

「貴子叔母ちゃんがいつも来てくれるから、だいじょーぶ」

と言った。

それを受けて曜子は、

「また、あなたは……」

と言って、ひとしの方を向き、瞬時、しかめっ面になった。

ひとしは必死の態で、

「いやいや、俺食事作れないんだから、仕方ないだろ？ 怒って病気が治ったためしなんてないんだから、あんま怒んなよ。病気が治る秘訣ってなんだか知ってるか？ 笑うことなんだよ！ だからおまえも毎朝、あはははは、と笑う練習を怠るなよ！」

などと冗談まじりの言い訳をした。

ひとしはその頃から冗談ばかり口にする人間だった。人生の楽しみの半分は冗談を口にする事と言ってもいいぐらいであった。よって、その冗談に付き合ってくれる曜子がいなくなることは、人生の楽しみの半分を失うことを意味していた。ひとしは表面上軽薄な冗談でごまかしていたが、内心は誰よりも曜子の死を恐れていたに違いなかった。それは、まだほんの子供であるみさこの目にも明らかなことだった。

ついに大腸癌の摘出手術の日がやってきた。ひとしとみさこは大学病院へ向かった。

二人して待合室で待っていると、医師はマスクの上からでもわかるような微笑を浮かべながら、「がんばりましたね、曜子さん」と言って、ストレッチャーに乗せられた曜子を病室まで運んでいった。

ややあって、

「ご家族の方、こちらへどうぞ」

と医師に呼ばれた。

二人は手術室に隣接している小部屋に案内され、切除した大腸の一部と癌を見せられた。タッパのような容器の中で、うす紫の液体に漬けられている大腸の一部と癌は、みさこの目にはファミレスの見本品のように見えた。

「触ってみますか？」

と医師が言うので、みさことひとしは手渡された手袋を手にはめ、癌の部分に触ってみた。

ひとしは意外と硬い癌を触りながら、

「こんなでかいのが曜子の中にあっただのか……」

と呟いた。そこに笑顔は一切なかった。

みさこは、癌をぶにぶにと触りながら、なんの気なしに、

「なんで、こんなものがママの中にできたの？」

と言った。

医師は大人の余裕で微笑み、

「それは、一言では言えないかなあ。様々な原因があって、なるんだよ。生活習慣とか、ストレスとか、遺伝とかね。お嬢ちゃんには、まだ難しいかな？」

と説明した。

場は一瞬、ほのぼのとした雰囲気になった。

ひとしも仕方なしに笑っていたが、内心は笑えなかった。すべては自分のだらしなさのせいなのだ、という思いがあったからであった。

そして2年後、抗がん剤治療の甲斐なく、曜子は転移した肺癌で呆気なく死んだ。

不幸は重なるものである。ひとしの仕事環境も一変することになった。

ひとは元々、親戚の叔父の会社に勤めていた。役員の立場にまで昇進していたが、その仕事ぶりはひどく、たびたび大赤字を出していたので、いきおい会社から追い出される運びとなった。そこで退職金が出ないというごたごたが起こった。さすがのひとしもそれには納得できず、「俺は俺でエンジニアリング業の小さな会社を立ち上げる。退職金が出せないんなら、せめて会社の駐車場の小さな事務室を俺にくれ！」と食い下がったのである。

エンジニアリング業ときいても、みさこはぴんとこなかったし、今でもよく知らない。どうやら会社に在籍していた頃にお付き合いのあった会社とのコネを利用し、細々と経営しているらしかった。つまり、事務室を借りていることも含めて、結局は解雇された会社のおこぼれで成り立っている、というのが偽りなき実情のようであった。加えて実際の仕事といえば、見積書を携えて交渉に行くか、現場視察をしに行くかに限られていた。結果として、会社勤めをしていた頃と比べて自由な時間がぐっと増えることとなった。

それ以降、ひとしとみさこは、現在のようによく外食に出かけるようになったのである。

今でこそ、みさこが成人したゆえをもって、スナックで恋人を作ったりしているが、当時は娘にとって大事な時期だと慮ったのか、ひとしも恋人等を作ることは一切なく、出来る限りみさこに触れ合う時間を作ろうと努めていた。

外食に行くと、ひとしはよく笑い、よく冗談を言った。

そしてこのあたりから、みさこに亡き妻の代役としての役割が生じはじめたのである。

お笑い芸人を志したことも、元をただせばこのあたりに要因があった。

みさこは元来、決してお笑い好きではない。それはとりもなおさず、父親であるひとしの嘘の笑いに対する嫌悪感に端を発していた。

けれど、ひとしの笑いを肯定しなければ、今までの家庭の幸福をも否定することになる。

そんな風に考えたみさこは、長ずるに及んで、

「人は笑顔でなければならない」

と思い込むようになっていった。

これがみさこにとっての不幸のはじめであった。

結局、みさこは自宅マンションに引きこもり状態となった。

寺山やひとしも音信不通になり、外部との接触は一切絶ってしまった。

それまで出演していたレギュラー番組6本はすべて体調不良を理由に降板となり、主演していたCMもオンエア取り止めになるなど、みさこをめぐる騒動は、日を追うごとに大問題へと発展していった。

幾日もぶっ続けにぞろぞろと報道陣たちがみさこのマンションの前に通いつめていた。

今にも雨が降りそうな陰鬱な曇り空の下、朝早くから貧相なジャンパー姿の記者たちが、ちらちらと時計を気にしながら、みさこが出てくるのを今か今かと待っていた。たまに記者の一人がうっかりあくびなどをしたりすると、白い息が宙に溶け込んでいった。

どこから情報が漏れたのか、そろそろみさこの父親が娘を奪還するのではないか、との情報がまことしやかに喧伝されていたのである。

報道陣は二週間ほど前からマンション周辺の偵察を行うなどおさおさ怠りなかった。近隣住民たちは内心びくびくもので、事の進展を待っていた。時たま出歩く者があっても、報道関係者らしき人物たちがひそひそ耳打ち話をしている姿にすぐさま怖気づいて、往来の壁際を小走りに逃げ去っていく始末だった。近隣のマンションには高名な芸能人も住んでいたが、今はめいめい影をひそめていた。

街中をひりつく沈黙が覆っていた。今にも雨が降ってきそうなのに、なかなか雨は降り始めなかった。

ややあって、ひとしがマンションにやってきた。

報道陣の一人なのではないか、と疑われるほどの貧相なジャンパー姿で、顔を俯きがちにしてフラッシュの嵐の中を足早に通り過ぎようとするその様は、どこか衰れであった。背中に記者からの質問責めを受けながら、ひとしは自分たち家族が世間に晒されていることを痛切に感じざるを得なかった。

ひとしはテレビのニュースでみさこの現状を知ったのである。

単独ライブをドタキャンしたこと。そして、以来自宅マンションに閉じこもっていること。

そのニュースを知ったとき、まず真っ先にみさこのお笑い芸人としての笑顔が浮かんだ。その笑顔が、今のひとしには悲しく思えた。それはなんらかの結論のように思えた。そして、やはり次のような決まり文句が頭に浮かんできた。

なんという言葉をかけてやればいいのかわからない。

まずは手始めにメールを、と思いついたものの、やはり何一つうまい言葉が思い浮かばず、埒が明かなくなり、れいの恋人が経営しているスナックへ行くことにした。

「……知っているだろう？」

「みさこちゃんのこと？」

「ああ。……どうしたらいい？」

ひとしはろくすっぽ恋人の顔も見ず、自身の膝頭をさすってばかりいたのである。

恋人の女は内心うんざりしながらも、

「責任感が強いものね、あの子。テレビで見ているとわかるわ」

とあり合せのなぐさめの言葉をひとしにかけた。

その言葉を聞いて、ひとしは瞬時、亡き妻のことを思い出した。次いで、恋人の女の方がよっ

ぽどみさこに詳しいような気がしてきて、呆然とした。

飲めば飲むほど、まったく酔えなかった。考えれば考えるほど、何から何まで自分の責任のような気がしてくるのだ。

結局、あまり考えがまとまらないうちにひとは次のように結論づけた。

とにかくみさこに会いに行かなければ。

インターホンが鳴った。その一回がとても長く聴こえたのは、みさこが上の空だったからだろうか？ みさこははっとして、玄関へと慌てて駆けていった。

「ウィリアム？」

「……父さんだ」

ウィリアムではなかった。ひとしだったのだ。

なんで？ やっぱり、もう来ないの？ 彼は本当に幻だったの？

今のみさこは、心が壊れたと言われてもおかしくないほど、無様な女の姿になっていた。

「……いるのか。おまえ、どうしたんだ？ 大変なことになっているのは、わかっているな？ ……この前の食事のことが、原因なのか？」

みさこは話半分で聞いていた。それより涙が出てきて出てきて、仕方がないのだ。

「おまえ、今、どういう状況なんだ？ ものは食べているのか？」

「もう無理なの、もう、すべて遅いの」

「人様にも迷惑をかけてるんだ。とりあえず、開けてくれ。話し合おう。な？」

みさこはそれに応じなかった。

案の定、話が途切れてしまった。

それでもひとは、父親としてこのままでは帰れない、と思い直し、

「みさこ、お願いだ。顔だけでもいいから見せてくれ」

と懇願した。

答えはなかった。ただ、嗚咽だけがかすかに漏れ伝わってくるばかりだ。

ひとは下唇を噛んで、盛んにまばたきしながら、

「……わかった。無理に出てこなくてもいい。でも、周囲の人に迷惑をかけるのは、いい加減やめなさい。ちゃんとマネージャーさんや所属事務所の人たちに連絡して、あやまりなさい」

言っている途中、普段言い馴れてないことを口にしてているせいか、まばたきの数がさらに増えた。

ひとしがマンションのエントランスを出ると、おびただしいフラッシュの出迎えが待っていた。ひとは無言で立ち去ろうとしたが、どっこいそうはさせぬと荒れ狂う一団から罵声にも似た質問が飛んだ。

「みさこさんは一緒じゃないんですか！」

「みさこさんの今の状況はどうなんですか！」

「恋人と一緒になんですか！」

永遠に止みそうもない質問を背中に浴びながら、ひとはやはり何も答えず、そのままマンシ

ヨンから立ち去っていった。

みさこは再びクローゼットの中で体育座りをしていた。

泣き終えた人の常で、口は小さく半開きになったまま、目は何も見ていなかった。みさこの世界は驚くほどしんとしていた。外の騒音はまったく聴こえていなかった。

「人に迷惑をかけちゃだめ」

そう言って、前田優子は死んでいった。

しかし、わたしは今、まさにそれをやらかしてしまっている。

他人に迷惑をかけないための努力が、かえって迷惑を呼び起こしている。

ウィリアムは他人に迷惑をかけて生きているが、人としての心の充実がありそうに見える。あれが人として正しい姿なのだろうか。……なんて、こんな自問自答こそ、うそくさい。わたしの愛想笑いも、ウィリアムの微笑も、極端な例に過ぎない。笑いとは、ああ、笑いとは、なんとがんじがらめなのだろう。

話ここに至って、みさこは、すべてどうでもいい、と思った。

思考が途切れて、真空状態が訪れた。ウィリアムの微笑がかすかに脳裏に浮かんだ。

結局、ウィリアムは何も残さなかった。

しばらくすると、逆に頭が冴えてきた。

途端に、この部屋の外には、もはやお笑いの世界とは違う現実が待っている、ということが、いやにはっきりとわかってきた。

今のみさこには、その現実に対して笑いをとれる自信はなかった。